

Contents

- ・学会に向けて
- ・徳力賞受賞者から
- ・新評議員自己紹介
- ・Transmitter(essay)
温故知新
前程万里
- ・事務局から
会員執筆論文紹介
- ・編集後記

JSVN Letter

Volume 2
April 1, 2019



学会に向けて

獣医神経病学会2019(東京大会)に向けて

大会長 日本大学 北川 勝人

2019年度の獣医神経病学会を6月29日(土)～30日(日)の2日間にわたり、御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターにて開催させていただきます。本学会では、教育講演として脳脊髄液動態、犬と猫の遺伝性疾患についての講演を予定しています。

脳脊髄液循環の考え方は20世紀初頭に示されたものが基本となり、側脳室-第3脳室-第4脳室-脊髄クモ膜腔に流れ、脳表クモ膜顆粒から吸収される、その方向は一方向であると考えられています。近年、MRIの特殊撮影により、既成概念と異なる脳脊髄液動態動態が明らかになっています。これらの知識は水頭症などの脳脊髄液循環障害の診断治療を行う上で重要になると思います。今回は、脳脊髄液動態を可視化できるTime-SLIP法にて、脳脊髄液動態の概念を変えた東芝林間病院の山田晋也先生に脳脊髄液動態研究の現状と新しい概念を紹介して頂く予定です。

遺伝性疾患は、染色体や遺伝子の異常によって起こる疾患であり、小動物領域では蓄積病や変性性脊髄症などが代表的な疾患です。様々な疾患の遺伝子異常が認められるようになってきました。遺伝子診断が発展している中、遺伝子病についての知識を整理することが必要かと考えています。今回は、この分野では第一人者である鹿児島大学の大和修先生に、よく遭遇する遺伝子疾患と変性性脊髄症などの新しい知見を紹介していただきます。

また、トピックスとして、獣医領域において始まりつつあるてんかん外科研究の現状、アジアにおける獣医神経病専門医の現状について解説します。会員の皆様には、奮ってご応募、ご提案そしてご参加いただきますようお願い申し上げます。



徳力賞受賞者から

東京大学 獣医病理学研究室 博士課程3年 志賀崇徳

この度は徳力賞という荣誉ある賞を頂きまして大変光栄に思います。また学会前に、内田先生から「賞をとってこなかったらただじゃおかない」と激励の言葉をかけられておりましたので、ほんとと安堵の息をついております。私は学部生の頃から筋病理の研究を始めましたが、最初はなかなか症例が集まりませんでした。どうすればもっと筋生検を実施してもらえるのか、懇意にして頂いている奥野先生とお酒を酌み交わしながら作戦会議をしたことが記憶に新しいです。それから6年経ち、症例に基づいた基礎研究が少しずつ形になってきたなかで、今回このような賞を思いがけず頂けたことは大変励みになりました。常日頃から熱心にご指導くださった諸先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。今後もより深く筋病理の道を追求し、米国のDr. Sheltonのような動物の筋疾患研究の大家を目指して精進して参る所存です。獣医神経病学会に所属されておられる先生方には今後ともご指導くださいますようお願い申し上げます。



東大獣医学専攻卒業式の写真。中央が中山先生、その隣に筆者を抱きかかえる内田先生、一番左がチェンバーズ先生。

新評議員あいさつ 第2回

はとがや動物病院院長 溝口 俊太



2018年6月の獣医神経病学会にて評議員を拝命いただきました、溝口俊太です。私は、日本獣医生命科学大学出身の11年目の獣医師になります。私の神経病との出会いは、学生時代の放射線学教室への入室がきっかけであり、当時の織間博光教授、長谷川大輔 助手のもとで神経病学の学びがスタートしました。その頃、研究室にはGM1ガングリオシドーシスの柴犬、ミオクロニー発作のミニチュア・シュナウザー、特発性てんかんの猫などが飼育されており、彼らを通じて神経徴候の観察やてんかん発作など直に見て学ぶ機会が得られたと印象深く思い出されます。その後は3年間の一般臨床の経験を得て、長谷川大輔先生のもとで大学院生として母校に戻りました。在学中は、家族性自然発症性てんかん猫家系の研究に打ち込み、脳波やMRIによる画像解析、病理組織学的解析などを用いて、このてんかん猫家系におけるてんかん原生領域の解析を行いました。4年間の間には実験や研究、英語論文執筆、学会発表などその多くを長谷川先生にご指導いただき、大変でありながらも、非常にかけがえのない経験を積ませていただきました。現在は、父が開業している埼玉県の動物病院において一般診療に従事しております。獣医神経病学会は学部生時代より、(おそらく)1度も欠かさずに参加しており、多くの神経病を愛する全国の先生方と出会うきっかけを与えてくれました。その学会のために評議員として微力ながら尽力させて頂きたいと思っております。

温故知新

「なまくら四つ」

小川博之

獣医神経病学会名誉会員
東京大学名誉教授



稀勢の里が惜しまれながら引退した。2017年初場所後横綱に上りつめたが、春場所の日馬富士との一番で左大胸襟断裂の重傷を負い、8場所休場後引退を余儀なくされた。相撲の世界では、自分の得意な型を持たない力士をさして「なまくら四つ」という。左押っつけという得意の型で横綱になった稀勢の里は最大の武器を奪われて「なまくら四つ」になってしまった。

自分の獣医師人生を振り返るとまさに「なまくら四つ」であった。診療対象は時代とともに牛馬から犬猫に変わり、一応外科を標榜していたが専門性は乏しく、研究では「止血」をテーマとしたが学生の卒論が頼りであった。

「なまくら四つ」も極めれば右四つでも左四つでも勝てるようになり、横綱になれるという。私にはできなかったが、神経病を学ぶ会員諸君には得意の型を作り、動物臨床の横綱になれるよう願っている。

Transmitter 第2回

前程万里

「知られざる福井の魅力」

柴田光啓

どうぶつ診療サポート
どうぶつの総合病院 神経科

昨年末より拠点を福岡に移し、育児に翻弄する傍らで埼玉と福岡の両方で診療を行っております。将来は九州や私の地元の北陸などで、微力ながら地域の神経病の発展に少しでも貢献できればと思っております。

さて、今回は私の出身地である福井をご紹介します。訪れた機会のある方は少ないと思いますが、知られざる?名所をご紹介します。福井は、別名Dinosaur Kingdom Fukui(DKF)と呼ばれるほど、国内随意一の恐竜化石の産出地として知られています。5種の新種が発見され、恐竜化石としては初めて国の天然記念物にもなっております。主張が弱い福井にしては珍しく県を挙げて恐竜押しです。県内のいたるところで恐竜に出くわしますが、駅前に巨大な恐竜が佇む場所は恐らく世界でここだけでしょう(写真)。中でも一押しが、世界三大恐竜博物館の一つ、福井県恐竜博物館(Fukui Prefectural Dinosaur Museum: FPDm)です。黒川紀章氏によって設計された無柱の巨大なドーム状の建物内に、44体の恐竜骨格が厳かに鎮座する空間は圧巻です。恐竜といえば特徴はその長い首です。キリンも含めてほとんどの種が7個で構成される哺乳類とは異なり、恐竜の頸椎は種によって様々であることが知られています。もっとも多いのはマメンチサウルスで、19個もあります。そんなに長い首で椎間板ヘルニアになったら…と居た堪れない気持ちになります(多くの鳥類や爬虫類と同様に恐らく恐竜にもなかったと推測しますが)。もし生き残っていたら我々の診療対象になっていたかもしれないと思うと、ゾッとする反面、どんな神経疾患があったか興味深いですね。密かに頸椎の数を数えるもよし、頭蓋骨の形態の違いを観察するもよし、子供だけでなくマニアックな獣医師も飽きさせない魅力がFPDmにはあります。今年の夏休みは福井でジュラ紀にタイムスリップし1億年前の恐竜の神経事情について想いを馳せるのは如何でしょうか?ご興味のある方は、診療の合間にQRコードからアプリ(AR恐竜王国福井)をダウンロードして恐竜体験をどうぞ。



iOS



Android

会員の先生方の掲載論文(国際誌)

【腫瘍】

- Kishimoto TE, Chambers JK, Miyama K, Son NV, Kok MK, Uneyama M, Miwa Y, Nakayama H, Uchida K
Neuromastoma of the hard palate mucosa in an Australian green tree frog (*Litoria caerulea*)
J Vet Med Sci. 2018. 80(10):1511-1514.
- Kishimoto TE, Uchida K, Thongtharb A, Shibato T, Chambers JK, Nibe K, Kagawa Y, Nakayama H
Expression of oligodendrocyte precursor cell markers in canine oligodendrogliomas
Vet Pathol. 2018 55(5):634-644.
- Sato, A, Hara,Y.
Protein expression of somatostatin receptor 2, somatostatin receptor 5 and dopamine D2 receptor in normal pituitary gland and ACTH-secreting pituitary adenoma in dogs.
Res Vet Sci. 2018 119:61-66.
- Tamura S, Tamura Y, Uchida K.
Recurrence of spinal anaplastic astrocytoma in a cat after surgical treatment and long-term follow-up.
J Feline Med Surg. 2018 20(2):200 -201.

【変性性疾患】

- Takaichi Y, Ano Y, Chambers JK, Uchida K, Takashima A, Nakayama H
Deposition of phosphorylated α -synuclein in the rTg4510 mouse model of tauopathy.
J Neuropathol Exp Neurol. 2018 77(10):920-928.
- Yokota S, Kobatake Y, Noda Y, Nakata K, Yamato O, Hara H, Sakai H, Nishida H, Maeda S, Kamishina H.
Activation of the unfolded protein response in canine degenerative myelopathy.
Neurosci Lett. 2018 687:216-222.

【遺伝性疾患】

- Chambers JK, Thongtharb A, Shiga T, Azakami D, Saito M, Sato M, Morozumi M, Nakayama H, Uchida K
Accumulation of laforin and other related proteins in canine Lafora disease with EPM2B repeat expansion.
Vet Pathol. 2018 55(4):543-551.
- Ito D, Ishikawa C, Jeffery ND, Ono K, Tsuboi M, Uchida K, Yamato O, Kitagawa M.
Two-Year Follow-Up Magnetic Resonance Imaging and Spectroscopy Findings and Cerebrospinal Fluid Analysis of a Dog with Sandhoff's Disease.
J Vet Intern Med. 2018 32:797-804.

【炎症性疾患】

- Kobatake Y, Sakai H, Nishida H, Uematsu Y, Maeda S, Kamishina H.
Hypertrophic neuritis causing tetraparesis in a cat.
J Vet Med Sci. 2018 80(8):1277-1280.

【脊椎・脊髄】

- Fujioka T, Nakata K, Nishida H, Sugawara T, Konno N, Maeda S, Kamishina H.
A novel patient-specific drill guide template for stabilization of thoracolumbar vertebrae of dogs: cadaveric study and clinical cases.
Vet Surg. 2018 Dec 20.
- Iwata,M., Yamamoto,W., Shimomoto,T., Okada,Y., Oosawa,S., Miura,D., Hara,Y.
Persistence of vertebral growth plate cartilage in aged cynomolgus monkeys.
J Toxicol Pathol. 2018. 31:151-154,
- Kimura S, Yamazaki M, Tomohisa M, Mori T, Yanai T, Maeda S, Kamishina H.
Infiltrative lipoma causing vertebral deformation and spinal cord compression in a dog.
J Vet Med Sci. 2018 80(12):1901-1904.
- Ryu Y, Ogata T, Nagao M, Sawada Y, Nishimura R, Fujita N
Effects of Treadmill Training Combined with Serotonergic Interventions on Spasticity after Contusive Spinal Cord Injury.
J Neurotrauma. 2018 35(12):1358-1366.
- Takahashii,F., Hakozaiki,T., Kouno,S., Suzuki,S., Sato,A., Kanno,N., Harada,Y., Yamaguchi,S., Hara,Y.
Atlantooccipital overlapping and its effect on outcomes after ventral fixation in dogs with atlantoaxial instability.
J Ve Med Sc. 2018. 80:526-531,
- Takahashi,F., Hakozaiki,T., Kouno,S., Suzuki,S., Sato,A., Kanno,N., Harada,Y.,Yamaguchi,S., Hara,Y.
Epidemiological and morphological characteristics of incomplete ossification of the dorsal neural arch of the atlas in dogs with atlantoaxial instability.
Am J Vet Res. 2018 79:1079-1086.

【てんかん】

・Fukunaga K, Matsumoto H, Wate M, Misawa K, Saito M, Matsuda H, Orito K.

Effects of three infusion fluids with different sodium chloride contents on steady state serum concentrations of bromide in dogs

J vet Pharmacol Ther 2018 41:684-690.

・Hamamoto Y, Hasegawa D, Yu Y, Asada R, Mizoguchi S, Kuwabara T, Wada M, Fujiwara-Igarashi A, Fujita M.

Statistical structural analysis of familial spontaneous epileptic cats using voxel-based morphometry.

Front Vet Sc. 2018 5:172. <https://doi.org/10.3389/fvets.2018.00172>

・Togawa G, Saito M, Iwata S, Watanabe N, Orito K.

Effects of Chloride in the Diet on Serum Bromide Concentrations in Dogs

Intern J Appl Res Vet Med 2018 16(3): 197-202.

・Ukai M, Hamamoto Y, Yu Y, Fujiwara-Igarashi A, Fujita M, Hasegawa D.

Efficacy of zonisamide on interictal electroencephalography in familial spontaneous cats.

J Feline Med Surg. 2018 20(10):962-967.

・Yu Y, Hasegawa D, Hamamoto Y, Mizoguchi S, Kuwabara T, Fujiwara-Igarashi A, Tsuboi M, Chambers JK, Fujita M, Uchida K.

Neuropathologic features of the hippocampus and amygdala in familial spontaneous epilepsy cats.

Am Jo Vet Res. 2018 79(3):324-332.

【電気生理】

・Togawa G, Saito M, Watanabe R

Assessment of the F wave technique for motor unit number estimation in normal dogs.

Vet J 2018 234:30-35.

獣医神経病学会2019の一般演題を募集します

・演題内容: 基礎研究、臨床研究、および症例報告(詳細は募集要項を参照)

・募集演題数: 10題前後

・発表時間: 発表・質疑応答含め1題につき20~30分(発表15-20分、残り質疑応答) 演題が決まり次第、時間は決定し連絡します。

・一般演題募集要項が適応されます。「一般演題募集要項」を確認の上、ご応募ください。

また、演題数を大幅に上回った応募があった場合には、執行部で判断し演題をお断りする可能性もあります。

□申し込み方法: 下記の必要事項を明記の上メールにてお申し込み下さい。

* 募集締め切り: 2019年4月24日(水)必着、抄録を添付(抄録添付のないものは無効となります)

・宛先: 獣医神経病学会事務局 (jimu@shinkei.com) ヘメール にてお送りください。

・件名に「2019年獣医神経病学会一般演題申し込み」と明記して下さい。

* 1日目を基礎研究・内科系とし2日目に臨床研究・外科系と考えておりますが、応募演題の内容や数によって振り分けますのでご了承下さい。また何らかの事情により29あるいは30日のいずれかにしか参加できず、その参加日でご発表されたい場合には申し込みの際にお知らせ下さい。

編集後記

会員の先生方は、積極的に論文投稿されているのがわかります。またご執筆いただいた先生方の個性も際立ち、とても興味深く読ませていただきました。この様な素晴らしい会のお役に立てるべく、広報委員を担わせていただくことに感謝しております。よりいいものをお届けしたいと思っておりますので、会員の皆様方におかれましては忌憚のないご意見をいただければ幸いです。宜しくお願い致します。

編集長: 宇塚雄次

編集委員: 宇津木真一 小澤剛 チェンバーズ・ジェームス 和田昌絵

ご意見窓口: 小澤(ozvet@k9.dion.ne.jp)